



国際人材

学生が主体となった新潟発の国際プログラムは どのように成功したのか

How an international program was achieved by Niigata University undergraduates

山田将慶¹⁾・白石景子¹⁾・櫻井盛太郎¹⁾・長谷川英夫²⁾・ウイタカ アンドリュー²⁾

Masayoshi Yamada¹⁾, Keiko Shiroishi¹⁾, Seitaro Sakurai¹⁾, Hideo Hasegawa²⁾, Andrew Whitaker²⁾

1) 新潟大学農学部

2) 新潟大学自然科学系

1) Faculty of Agriculture, Niigata University

2) Institute of Science and Technology, Niigata University

論文受付 2018 年 1 月 20 日 掲載決定 2018 年 2 月 15 日

要旨

新潟大学農学部公認グローバル人材サークルBRIDGEは2011年から学生のグローバル化を目的に活動し、過去にも様々な国際交流・海外視察をした。2017年にはアジア農学学生会議（APDM: Asia Pacific Directors Meeting）を開催し、国外の学生とのワークショップや農業関連施設の視察を行った。インドネシアとネパールから9名の学生を招聘し、SNS等を使って国内の学生に直接参加を呼びかけた。民間企業との協働のワークショップでは地方創生の可能性を感じた。助成金を獲得するためにAPDMが各財団の助成目的に合致しているかを吟味し、役割分担と情報交換に力を注いで開催資金を調達した。また、本プログラムのワークショップで得たことを元に、ムスリム快適化3原則を提言し、「第1回新潟国際化デザインコンテスト住みよい街、新潟の探求」で最優秀賞を獲得した。BRIDGEが継続して活動できた理由は国際的な視野が広がる経験を共有できる場であったからである。BRIDGEが積み重ねてきた海外に目を向けた活動と地域に目を向けた活動を通し、今後もグローバルな人材育成の場として地域の持続的な発展を担っていきたい。

キーワード：学生主体、人材育成、地方創生、キャリア形成、助成金

Abstract. BRIDGE is a circle for global-minded students which is recognized officially by the Faculty of Agriculture Niigata University. Working for the globalization of students it has been active since 2011 and has conducted international exchange and overseas inspection tours in agricultural regions. In 2017, we held the Asia Pacific Directors Meeting (APDM). The content of APDM consisted of workshops and visits to facilities related to sustainable agriculture. We invited 8 participants from Indonesia and Nepal, and promoted interactions with domestic students interested in agricultural fields outside of Niigata University by using social media. In the workshop on cooperation with private enterprises, we sensed the potential for regional revitalization.

In order to acquire funds, we examined whether APDM conformed to the purpose of subsidy for each granting foundation, by focusing on role sharing and information exchange. In addition, based on what we achieved at the workshop during this meeting, we proposed three principles for Muslim students who live in Niigata to allow them to live more comfortably, and won the first prize at “The 1st Niigata Internationalization Design Competition “. BRIDGE has played an important role as a place where international experiences and perspectives can be shared. That’s why BRIDGE has continued to be active since establishment. Through international and local activities conducted by BRIDGE, we will continue to develop the local community by fostering global human resources.

Key words: Students’ initiative, Human resources development, Regional revitalization, Career development, Grant application

1. 新潟大学農学部公認グローバル人材育成 サークルBRIDGE

BRIDGEはマレーシアで開催された世界農学学生会議 (IASS : International Agriculture Student Symposium) や新潟大学農学部主催の新潟大学GP (Good Practice Program) に参加した学生によって結成された。これらの活動に参加した学生は、IASSや新潟大学GPに参加したマレーシアやインドネシアの学生が、高度な英語力、企画力、プレゼンテーション力、ディスカッション力、専門性を有しており、これらの能力が特に新潟大学のような地方大学の学生に圧倒的に不足していると痛感していた。こうした背景のもとに、学生が主体となった新潟大学農学部のグローバル化を目標として、農学の専門性を生かして国際的な視野から個々の潜在能力を高めることが活動の目的となった。

国際交流・海外視察を通じて育まれたグローバルな視点は、新潟県をはじめとする日本の地域活性化に必要不可欠であり、県内企業・行政との活動の連携を図ることで地域に還元できるグローカル(グローバルとローカルを合わせた造語)な人材となることを目指すこととなった。サークルの名称は東アジアを基点として農学の視座から世界の「架け橋」となる意思を込めてBRIDGEと命名した(図1)。また新潟県のシンボルである重要文化財「万代橋」にも由来している。

2017年10月現在、総勢37名(大学院生:1名、4年生:4名、3年生:8名、2年生:11名、1年生:13名)が所属しており、サークル長1名、副サークル長2名を代表とする運営体制をとり、長期間に渡る準備を要する活動は予算担当や広報担当を割り当てている。週に一度、情報共有や採決が必要な議題について会議を開催し、総意の元での組織運営を心掛けている。広報活動は主としてホームページやSNSを通じて、情報発信やイベントの告知を担当する(表1)。

(1) 世界農学学生会議 IASS

IASSはBRIDGE設立の1つの契機である。IASSはプトラ大学 (UPM: Universiti Putra Malaysia, マレーシア) の学部生らが主体となって東南アジア地域の学生らに参加を呼び掛ける隔年開催の国際シンポジウムである。BRIDGEは日本代表として10名程度が毎回参加し、各自が調査・研究した内容を発表してきた。海外での発表経験がない学生が多いため、上級生や外国人教員らのサポートを得ながら、テーマの深掘りや英語による発信力を鍛えてきた(図2)。



図1 BRIDGEの正式ロゴ

(2) 国際農学学生協会 IAAS

BRIDGEは国際農学学生協会 (IAAS : International Association of Students in Agricultural and Related Sciences) の日本支部である。IAASは、「経験、知識、アイデアの交流を促進し、世界中の農業とそれに関する分野の学生間の相互理解の進歩¹⁾」を目的とした国際的な学生農学団体である。1957年にルーヴェン・カトリック大学(ベルギー)で発足し、国際的な学生農業団体としては世界で最も歴史のある組織である。2017年12月現在、世界53ヶ国で1万人以上の学生が加盟している²⁾。

2013年1月、BRIDGEはCandidate Member(仮メンバー)として日本で初めてIAASに加盟し、日本支部としてIAAS Japanを設立した。BRIDGEの初代代表である近藤孝之氏の「より多様な価値観に触れるため、東南アジア地域に限らず多くの国と交流しよう」という掛け声のもと、2013年にボゴール農科大学(インドネシア)の推薦を受けて加入した。以後BRIDGEはIAASの加盟団体として活動しており、毎年7月に開催されるWorld Congressに参加してきた。2017年12月現在、IAASに加盟する国内大学は新潟大学だけという状況にある。BRIDGEは2016年から正式なメンバーとなったことで、IAASの幹部選出、予算などの議案について投票権を持っている。2016年のWorld Congressでは世界各地から60人以上の学生がインドネシアに参集した。IAAS Japanとして、山田将慶と櫻井盛太郎が代表として参加した(図3)。開催内容は、IAAS総会(GA: General Assembly)、インドネシアの農業施設を巡るフィールドトリップ、異文化交流を目的としたパーティー、観光であった。GAでは人事案件、財務状況、2020年に向けた目標設定、各国間の交流が行われた。農学分野において、学生主体で運営されるIAASのような国際的な学生団体は寡聞にして少なく、BRIDGEはIAASとの協働を通じて国内外にその活動を発信していきたいと考えている。

(3) 新潟大学GPとAUF

BRIDGEは新潟大学GP(2011年から2014年)と呼ば

表1 BRIDGEのこれまでの活動

年月	活動内容	参加人数(名)
2010年7月	第2回 IASS 参加	日本人学生2名 引率教員1名
2011年3月	第1回新潟大学GP開催 テーマ「コメ」	
4月	BRIDGE 創立	
2012年2月	第3回 IASS 参加	全参加学生49名 BRIDGE 12名
3月	第2回新潟大学GP開催 テーマ「食をめぐる水の旅」	海外学生6名 海外教員1名 BRIDGE 3名 国内教員1名
11月	海外農学研修 チェンマイ大学(タイ), ボゴール農科大学(インドネシア)を訪問	タイ4名 インドネシア4名
2013年1月	IAAS Japan 創立	
2月	第3回新潟大学GP開催 テーマ「農作物におけるプランディング」	海外学生9名 海外教員9名 BRIDGE 17名 国内教員4名
8月	第4回新潟大学GP開催 テーマ「ECO ISLANDO 佐渡」	海外学生7名 海外教員5名 BRIDGE 20名 国内教員7名
2014年2月	第4回 IASS 参加	全参加学生54名 海外教員5名 BRIDGE 8名 国内教員7名
8月	第5回新潟大学GP開催 テーマ「食文化と伝統、変わらないもの、変わりゆくもの」	海外参加者15名 国内学生3名 BRIDGE 21名
2016年2月	第5回 IASS 参加	海外参加者45人 BRIDGE 10人 日本人教員1名
同月	海外農業研修 カセサート大学(タイ)を訪問	BRIDGE 4名
7月	第59回 IAAS World Congress 参加	海外参加者60名以上 BRIDGE 2名
9月	第1回 AUF(Agricultural yoUth Forum)開催 テーマ「地方創生×儲ける」	海外参加者9名 BRIDGE 16名
12月	BRIDGE OB・OG会開催	OB 6名 BRIDGE 15名
2017年3月	海外農学研修 プトラ大学(マレーシア), ボゴール農科大学(インドネシア)を訪問	マレーシア4名 インドネシア5名
9月	APDM 開催	海外学生9名 国内学生18名 BRIDGE 23名



図2 第5回 IASSにて



図3 第59回 IAAS World Congressに参加時の様子



図4 第1回AUF フェアウェルパーティ



図5 カセサート大学訪問(2016年2月)

れる教育プログラムに農学部が提案した学生主体の国際会議に参加してきた。BRIDGEは教員主体で行われてきた企画運営を自ら行うことを第3回新潟大学GPから試行した。新潟大学GPは海外協定校であるボゴール農科大学（インドネシア）、プトラ大学（マレーシア）、チェンマイ大学（タイ）から教員と学生を招聘し、統一テーマのプレゼンテーション、地場企業視察、文化紹介を1週間程度の日程で行うプログラムであった。新潟大学GP終了後、学生主体の国際交流プログラムを再び主催したいというBRIDGEの強い要望があり、1年間の準備期間を経て2016年に第1回AUF（Agriculture yoUth Forum）と改称して開催した（図4）。開催資金は大学から支援と参加費で賄った。実施内容は「地方創生×儲ける」をテーマとし、地場企業視察、異文化交流、テーマに基づいた各国の事例紹介であった。このフォーラムを通じて、コミュニケーション能力の向上、国際理解、専門知識の共有、そして人的・知的ネットワーク

の更新と深化を図ることができた。

(4) その他

その他、BRIDGEが行ってきた活動には、海外農業研修（図5）、勉強会、OB会がある。海外農業研修は、活動で築いてきた海外の学生との人的・知的ネットワークを維持・発展させるとともに、専門性を深めつつ国際的な視野を広げることが目的である。国際力の向上を目的として勉強会を開催している。私たちは、「英語運用力、企画力、プレゼンテーション力、ディスカッション力、高い専門性」を兼ね備えることを国際力と定義している。OB会は、2016年に初めて開催した。BRIDGEの学年間のつながりの強化、過去の活動実績の共有、社会還元の有在り方を議論することを目的として企画された。

表2 APDM開催日程

日 時	内 容
2017年9月19日	Welcome Party
9月20日	フィールドトリップ① Development Fund
9月21日	Opening Ceremony General Assembly カルチャラルナイト
9月22日	国際ワークショップ
9月23日	フィールドトリップ②
9月24日	新潟観光
9月25日	東京観光

表3 海外参加者の内訳

参加者大学名(国名)	人数(名)
農業森林大学(ネパール)	2
ボゴール農科大学(インドネシア)	3
プラビジャヤ大学(インドネシア)	2
パジャジャラン大学(インドネシア)	1
マタラム大学(インドネシア)	1

2. アジア農学学生会議APDMについて

1) APDM概要

アジア農学学生会議(APDM: Asia Pacific Directors Meeting)は2017年9月19日から25日にかけて新潟大学で開催された(表2)。インドネシアの学生7名、ネパールの学生2名の計9名の海外の学生が参加した(表3)。

APDMのテーマは「持続可能な農業～For the Entire Species～」であった。現在の日本農業を紹介するにあたり「持続可能な農業への取り組み」がふさわしいと考え、このテーマを選択した³⁾。これからの農業を支えるアジアの学生が日本の持続可能な農業にふれ、自国で活かすことにより「農学分野における知の交流」、「参加学生が各国の農業に新しいアイデアを生む」という2つの目標達成を目指した。この2つの目標から世界規模での「持続可能な農業」の問題解決を目的に据えた。

本プログラムを通して、各国の気候、地理、技術、歴史、文化の違いを相互に理解した上で農業事情を共有した。さらに、人的交流を通して各国間の協力を深め、農学国際交流の発展に寄与したいと考えている。

以下にAPDMについて実施した企画の詳細を示す(表2)。

フィールドトリップは2日間にわたって行った。本企画は新潟県内の農業関連施設の訪問により、参加学生の「持続可能な農業」への理解を深めること及び農学分野の「国家戦略特区新潟⁴⁾」の認知向上を目的として行った。訪問先は以下であった。

(1) 新潟市農業活性化研究センター

「農業者が抱えている技術的な課題の解決や農村の活性化を支援するとともに、6次産業化や農商工連携を積極的に支援するための施設である⁵⁾」。職員から新



図6 瀬波南国フルーツ園でのフィールドトリップの様子

潟の農業の説明を聞いた後、施設内にあった最先端の農業技術を見学した。

(2) フルーツランド白根グレープガーデン

新潟市の「果樹生産で有名な新潟市南区白根⁶⁾」にある果樹を取り扱う観光農園である⁶⁾。職員から「有機質肥料・低農薬による栽培」や観光農園としての役割の話聞いた後、ブドウの収穫体験を行った⁷⁾。

(3) 新潟市アグリパーク食品加工支援センター・体験ハウス

農業の「6次産業化を支援する施設⁸⁾」である。施設内の多種多様な食品加工機器を見学した後、センター長より施設概要と6次産業化に関する取組みを学んだ。体験ハウスでは、施設内で製造された米粉を使用した米粉ピザづくり体験を行った。

(4) 瀬波南国フルーツ園

「廃棄物(現地で発生する食品残渣等)からエネルギーを取り出し、循環型農業に取組む観光農園」である⁹⁾。職員から循環型農業の仕組みを聞きながら視察を行った(図6)。

Development Fundは、参加者がそれぞれ自国の土産等を持ち寄りオークション形式で売買した。収益金はIAAS加盟国の中の発展途上国の活動支援金になった。

General Assembly(図7)は、IAAS Asia Pacificの結



図7 General Assemblyの様子

東強化とさらなる発展を目的として行われた。第一セッションでは、各国の活動と各国が抱える問題を共有した。第二セッションでは、次期APDM開催地の検討を行った。第三セッションでは、今後5年間の目標設定について議論し、合意を得た。

カルチャルナイトは参加者同士の文化交流を目的として行った(図8)。各国の民族衣装によるファッションショーと新潟大学のよさこいサークルの演舞鑑賞を行い、互いの文化理解を深めた。

クッキングナイトは、海外の参加者に新潟の伝統食を味わい新潟の文化を体験してもらうことを目的に、「新潟の伝統食であるのっぺ汁と笹団子」、さらに新潟米を使ったおにぎりを海外参加学生と調理した¹⁰⁾。

開催4日目には「海外でのコメ加工品の消費拡大」をテーマとしてワークショップを開催した(図9)。新潟市役所食と花の推進課、新潟県長岡市に拠点を置く岩塚製菓株式会社さらに国内大学の学生とBRIDGE構成員から成る総勢50名以上で実施した。会場に新潟日報社記者を招き、取材に応じた。記事は開催後2017年9月30日朝刊に掲載され、本ワークショップを広く地域社

会にアピールすることができた。

「海外で日本食ブームが巻き起っている¹¹⁾中」、「現在日本では国内のコメ消費量の減少¹²⁾に伴い農林水産省では農林水産物の輸出促進対策を実施している¹²⁾」また、「グローバル・フードバリューチェーン¹³⁾」という戦略的な取り組みも実施されている。こうした背景に加えて「コメの生産量日本一¹⁴⁾」、「コメ加工品産業が集積した新潟¹⁵⁾」という立地を加味してこのテーマを設定した。まず海外学生及びBRIDGEによる各国の稲作の現状に関する発表と新潟市役所食と花の推進課による新潟の農業の現状に関する発表ののち、各国の農業に関する相互理解を深めた。続いて、新潟県長岡市に拠点を置く岩塚製菓株式会社による5種類の米菓食べ比べを行い、嗜好を問うアンケートを実施した。最後に海外参加者と国内大学の学生及びBRIDGE構成員で構成された班に分かれ、その班に属した海外の参加者の出身国の食文化を加味したコメ加工品の考案を行った。

開催6日目と7日目に実施した観光は、文化交流と参加学生間の国際交流を深めることを目的として行った。新潟観光では、寺泊水族博物館と彌彦神社を訪れた。東京観光では、東京スカイツリーと浅草寺を訪れた。

2) APDM開催に至る経緯と運営体制

BRIDGEは新潟大学GPに2011年から参加し、2014年から企画運営に携り、さらに2016年もAUFを開催したという背景をもつ。学生が主体となり運営するGP・AUFの必要性を強く感じたため、2017年もAUF開催に向けて2016年11月頃から企画準備を進めていた。

まず、開催資金をどのように集めるかという問題は避けられない課題であった。なぜなら、今回は資金が大学から支給されないため、自ら開催資金を用意する必要があったからである。GP・AUFの開催を参加費のみで賄うことは困難であり、企業から協賛金を得るこ



図8 カルチャルナイトの様子



図9 国際ワークショップの様子

とも検討したが、趣旨に賛同する企業を見つけることはできなかった。そこで、競争的資金の獲得を目指すこととなった。第1回AUFの反省点として、地域社会との連携が希薄で社会還元が乏しかったなどの課題が挙げられた。第2回AUFでは、助成金獲得及び何らかの形で県内企業や行政と協働する内容を盛り込むことを目標とした。

2016年11月下旬から助成金申請書に記載する事業計画の作成に取り組んだ。2016年12月下旬に、切実であった双日国際交流助成へ提出した。以後、記載した事業計画の実行に向けて別団体への助成金募集への応募による資金調達と並行して企画内容を詰めた。

ところが2017年3月、IAAS Asia PacificからIAAS Asia Pacificの幹部会議であるアジア農学学生会議(APDM: Asia Pacific Directors Meeting)を日本で開催して欲しい旨の要望があった。IAAS Asia Pacificには、インドネシア、スリランカ、ネパール、日本、中国、台湾が加盟している。各国間のつながりが希薄であり、IAASの目的が現時点で達成されていないという課題があった。依頼を受けた会議を新潟で開催することには賛否両論があった。最終的にはAUFの内容に類似する点も多く、依頼を受けた会議を取り込んでもこれまでの企画内容を実施できること、日本支部からIAASの活動を活性化できる契機となることから、AUFに代わりIAAS Asia Pacificとの共催でAPDM開催を決定した。

2017年3月、前年12月に応募した双日国際交流基金の助成決定の通知を受けた。続いて他財団への申請を行い、すべての助成金を獲得した。また、NIIGATA COC+からの資金獲得の際にお世話になった学内教員に岩塚製菓株式会社を紹介され、国際ワークショップの実施に結びついた。約1年間にわたるBRIDGE構成員の総力を結集した準備により、第1回AUFでの課題であった社会還元性を持たせること、助成金の獲得を実現してAPDMの実施に漕ぎ着けた。

3) APDMの参加者募集

海外の参加者へはIAAS Asia Pacificのメーリングリストを用いてAPDMの開催報告と参加者の募集を行った。そこで集まった参加者の中から、IAAS Asia Pacificの幹部と参加者を厳選した。

また、BRIDGEの農学分野での国際交流によって得られる新たな価値観や異文化への理解などの学びを、より多くの国内大学の学生に還元したいと考えた。そのため、新潟大学以外の国内の学生に向けて参加者募集を行った。国内大学の学生は、BRIDGEとの交流が

表4 国内大学の学生参加者の内訳

国内大学の学生参加者	人数
東京農業大学	5
秋田県立大学	1
石川県立大学	1
大阪大学	1
神戸大学	4
佐賀大学	3
長崎国際大学	1
新潟大学	2
合計	18

あった全国の農業系の学生団体に周知した。その交流の場の1つとして学生団体「いろり」が主催する「Leaders Camp」が挙げられる。学生団体「いろり」とは、「全国の1次産業に熱い学生が集い交流する場、切磋琢磨する機会の創出、ネットワークの構築、都市農村間で対流が生じるような仕掛け作りを目的に活動するインカレの学生団体である¹⁶⁾」。

さらにFacebookにイベントページを立て、本会議についての情報を公開し、友人の大学生を中心にLINE・Messenger等のSNSを使い、参加への呼びかけも直接行った。また、その学生が同じ大学の学生に声をかけ、さらに参加者が増えることが何件もあった(表4)。

3. APDMの成果

APDMの成果は、何らかの形で県内企業や行政と協働する内容を盛り込んだ及び助成金獲得という目標を達成できたという点に焦点を当てて以下に示す。

1) 企業及び行政との協同活動

開催4日目に開催した国際ワークショップでは、岩塚製菓株式会社と新潟市を招待し社会還元性の高いプログラムを開催することができた。企業との協同活動を通じて地方創生の可能性が挙げられる。「地方創生とは人口減少などの課題に対して、各地域がそれぞれの特性を生かして自律的な社会を創り上げることであり¹⁷⁾」。自律的な社会とは、地域の持続可能な発展にあると考える。持続的な発展には、人材の育成、地域の特性を活かした事業の創造を行う必要がある。地方創生で地元企業が果たす役割は、地域の持続的な発展には必要不可欠である。

人材の育成の面では、地域はグローバルな人材の育

成を目指していかなければならない。国内需要の低下やグローバル化の加速を背景に、企業は新たな市場への参入を目指している。そして、多様な文化や価値観を持った人と仕事をする機会の増加、日本の大企業や中小企業に関わらず海外企業の競合が現れるようになった。それゆえ、地元企業は国際社会で通用する能力や広い視野、経験をもって、地域経済の活性化および持続的発展に貢献する人材を必要としている。

国際ワークショップでは、将来的に地域の発展を担うグローバルな視点を持った学生と地元企業の協同により、地域の特性を活かした事業創造・グローバル人材育成の場となった。グローバルな視点を持ち合わせた人材を集めることができたのは、IAASという国際的な団体や、BRIDGEとのネットワークを持っている学生団体と協同できた部分にあると考える。つまり、学生が構築している学生間ネットワークにより実現した。また、海外の学生が参加したことで、地元企業のプロモーションや海外市場参入の際の情報を集める機会となった。

行政との協同活動を通じた成果は、売れる商品や仕組みづくりを目指すフードデザイン、新潟のブランド価値の向上、県外や海外への情報発信を担うことができたと考える。これは「新潟市が高い都市機能と農業を含めた食産業を連携させ、食産業No.1都市を目指すニューフードバレー構想¹⁸⁾」の実現に寄与している。地域が抱えている課題解決、ビジョンの実現に主体的に関わり、地域に貢献できたと考えている。

2) 助成金獲得

助成金獲得にあたり、3点の課題があった。1点目がプログラム開催までの期間が短かったこと、2点目が確実に助成されるかどうか不明だったこと、3点目が今まで助成金を申請した経験がないため、申請書作成のノウハウがなかったことである。まず、どの助成事業がAPDMの目的に合致しているのかを吟味し、選んだ助成事業の申請書を書く担当者をそれぞれ定めた。ただ、役割分担をするだけでなく、情報交換することによって、より効率よく、助成されやすい申請書作成に力を注いだ。次に、助成金の書くノウハウを得るために、NPOの職員に申請書のチェックを依頼し、助成金を配分する側に事業の意図を明確に伝える文章の書き方などを教わった。それにより何回も申請書の内容が推敲され、より助成される可能性の高い申請書を書くことができた。様々な困難を乗り越え、申請した助成金をすべて獲得することができた(表5)。

表5 獲得した助成金内訳

財団名	助成額(円)
一般財団法人 新潟ろうきん福祉財団	900,000
公益財団法人 双日国際交流財団	300,000
公益財団法人 内田エネルギー科学振興財団	50,000
NIIGATA COC+	100,000

(1) 一般財団法人 新潟ろうきん福祉財団

『福祉はひとつ』の理念のもと誕生した労福協運動の新潟地域での更なる発展に貢献することを基本方針とした財団である¹⁹⁾。BRIDGEは「NPO等助成事業地域福祉団体助成事業」へ応募した。この助成金は、「NPOおよび市民活動団体等を支援し、これら団体の発展により県内勤労者をはじめとする県民福祉の向上を図ることを目的²⁰⁾」としている。

(2) 公益財団法人 双日国際交流財団

「人材育成、国際交流および国際関係調査・研究等に対する助成等を行うことにより、国際的な相互理解の深化に寄与することを基本方針とした財団である²¹⁾」。BRIDGEは「国際交流助成」に応募した。「本助成金は、海外における日本理解の増進に寄与・貢献する各種事業に治して行われるものである²²⁾」。

(3) 公益財団法人 内田エネルギー科学振興財団

「新潟県の経済・産業の振興と福祉の増進に寄与することを目的に展開する財団である。助成対象は研究活動や講演会、地域活性化活動など多岐にわたる²³⁾」。

(4) NIIGATA COC+ (Center of Community)

『文部科学省が実施する地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)がもととなっている。この事業は、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求められる人材を養成するために必要なカリキュラムの改革を断行する大学の取組を支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的とした事業である²⁴⁾。『本事業(NIIGATA COC+)は、新潟大学を中心に各大学、自治体、企業、経済団体等が一体となり、地方創生に取り組む事業である²⁵⁾。BRIDGEは、この中で「国際交流」の一環で助成金を頂いた。また助成金を通じて、「第1回新潟国際化デザインコンテスト住みよい街、新潟の探求」(次章で詳細に述べる)への出場権を頂いた。

3) NIIGATA COC+ 新潟国際化デザインコンテストでの最優秀賞の獲得

『2017年9月30日に開催された、前章で助成団体の

一つであるNIIGATA COC+主催の「第1回新潟国際化デザインコンテスト住みよい街、新潟の探求」で最優秀賞を獲得した²⁶⁾。本コンテストはBRIDGE（新潟大学として参加）、新潟県立大学、新潟国際情報大学、と青山学院大学、事業創造大学院（新潟県内）の合計5チームが参加した。各チーム、今年度（2017年度）のNIIGATA COC+国際交流のテーマである「留学生が住みよい街、新潟の探求」に関連した活動報告と新潟がより留学生にとって住みやすい街になるための提言について発表を行った²⁵⁾。BRIDGEは、今回の海外参加者のうち4名がムスリムであったことから、「ムスリムが住みよい街新潟を目指して」と題した発表を行った。ここで「ムスリム快適化3原則」を提言した。このコンテストへの出場の成果は、創立以来東南アジアの学生と関わってきたBRIDGEの視点を大学・企業・行政が一体となって取り組むCOC+という場で発信できたことにあると考える。

4. BRIDGEが継続する理由

BRIDGEが継続して活動できた根拠として、個々の経験を集団で共有できる場としての機能が挙げられる。BRIDGEが行う活動で得られる経験は世代を超えて共通するものがあるのか調べるために、新潟大学の卒業生や在校生であるBRIDGEの元構成員に活動を振り返っていただき、BRIDGEの活動とはどのようなものであったかを聞き取りした。

BRIDGEの創設者である近藤孝之氏は、活動を通して国内外で幅広い人脈が築けたと語った。また、BRIDGEが目指すグローバル人材になるためには単に、海外志向や英語力が備わっているだけではなく、社会人にとって必要な基本的なスキル、リーダーシップ、幅広い視野、イノベーション力など内面を充実させることが必要であると言った。

2017年12月現在学部4年生の加賀谷美和氏は深い思考力を持った構成員と深く関わることができ、自分のやりたいこと大切にしたいことを考え続けることができたと言った。

このようにBRIDGEの元構成員からは多種多様な意見があった。しかし、どの学生にも共通していたことは「活動を通して視野を広げることができた」という言葉であった。視野というのは、海外とつながりを持つことで得られる普通の大学生活では知りえない経験や、知識、人的交流である。BRIDGEはそれらを得ることができ環境が身近にあり、視野が広がる経験を集団で共有

することができる。この経験の共有こそがBRIDGEが団体として活動する意義であり、2011年から活動が継続した理由である。

5. 統括

BRIDGEは、新潟を拠点として世界の架け橋となることを目標として活動してきた。そして、海外と地域それぞれに目を向けてきた経験を共有する場としての機能を持ち続けてきた。具体的には、IASS、海外農業研修が海外に目を向けた活動であり、GP、AUF、APDMが地域に目を向けた活動である。それぞれの活動について、学生のキャリアにどのように活かしていくかを考えたとき、活動の目的を定義してみた。

私たちは海外に目を向けた活動を、自分たちの国際力を養う場であると考えている。将来的に日本が、海外進出や海外人材の採用などにより、多様な人材の中で生き残るために必要な力が求められる時代が来るからである。国際力として挙げられるのが、語学力、コミュニケーション力、プレゼン力、異文化を受容できる力、多様な意見をまとめられるリーダーシップ力である。IASS、海外農業研修を通して、これらの能力を飛躍的に向上させることで日本を背負っていく人材を育成していきたい。

そして地域に目を向けた活動を、活動の経験に裏打ちされた多様な価値観をまとめる力や、視野の広さを踏まえて、食の面から地域資源を有効に活用する取り組みを産学官が連携していく場所として位置づける。グローバルな人材を育成により地域の持続的な発展を担っていきたい。

謝辞

APDMを開催するにあたり、前自然科学系長 大山卓爾名誉教授、前農学部長 新村末雄名誉教授、農学部長 末吉 邦教授、学生支援・教育支援担当副学長 箕口秀夫教授、創立者をはじめとするBRIDGE OB・OGの皆様方、その他多くの方にお世話になった。特にビザ申請や助成金の申請書作成には多くの方々のご支援をいただいた。本報では学生が主体となって取組んだ国際プログラムの経験を述べたが、教員のみならず学部事務職員との連携なくして実現は困難であった。APDMの開催にご協力を頂いたすべての方々ここに記してお礼申し上げます。

引用文献

- 1) Vision and Mission. <https://www.iaasworld.org/vision-and-mission/> accessed in 22 December 2017.
- 2) Welcome to IAAS. <https://www.iaasworld.org/welcome-to-iaas/> accessed in 24 December 2017.
- 3) 外務省『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf> accessed in 22 December 2017.
- 4) 新潟市『新潟国家戦略特区』<http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/seisaku/jigyoproject/kokkatokku/tokku/index.html> accessed in 22 December 2017.
- 5) 新潟市『農業活性化研究センター』『農業活性化研究センターとは』https://www.city.niigata.lg.jp/business/shoku_hana/shisetsuannai/nougyokasseika/guide.html accessed in 22 December 2017.
- 6) 新潟市南区『区の概要』<https://www.city.niigata.lg.jp/minami/about/gaiyou.html> accessed in 22 December 2017.
- 7) フルーツランド白根グレープガーデン『当園について』<http://www.kudamonogari.com/about/> accessed in 22 December 2017.
- 8) アグリパーク『施設情報, 食品加工支援センターについて』<http://www.niigata-aguri.com/facilities/facilities5.html> accessed in 6 December 2017.
- 9) 瀬波南国フルーツ園『循環型農業』<http://nangoku.booo.jp/recycling/recycling.html> accessed in 22 December 2017.
- 10) 公益財団法人新潟観光コンベンション協会『新潟のご当地グルメ』https://www.nvcb.or.jp/shokusu/gotouchi_gourmet.html accessed in 22 December 2017.
- 11) 農林水産省『日本食・食文化の海外普及について』http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/kaigai/pdf/shoku_fukyu.pdf accessed in 22 December 2017.
- 12) 農林水産省『農林水産物・食品の輸出促進について』<http://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/attach/pdf/index-153.pdf> accessed in 22 December 2017.
- 13) 農林水産省『グローバル・フードバリューチェーン戦略～産学官連携による“Made WITH Japan”の推進～』http://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokkyo/food_value_chain/pdf/senryaku_3.pdf accessed in 29 December 2017.
- 14) 農林水産省『生産量上位について』<http://www.maff.go.jp/j/kids/crops/rice/farm.html> accessed in 22 December 2017.
- 15) 日本政府投資銀行『新潟における“食”関連産業の発展可能性—「米等加工品」産業を成長エンジンとする地域経済構造強化—』http://www.dbj.jp/pdf/investigate/area/niigata/pdf_all/niigata1612_01.pdf accessed in 22 December 2017.
- 16) いろり～田畑と森と海でつながる学生団体『いろりとは?』<http://irori-japan.com/aboutus/%E7%90%86%E5%BF%B5/> accessed in 26 December 2017.
- 17) まち・ひと・しごと創成 首相官邸ホームページ https://www.kantei.go.jp/jp/headline/chihou_sousei/ accessed in 26 December 2017.
- 18) 新潟市『新潟ニューフードバレーの推進』https://www.city.niigata.lg.jp/business/shoku_hana/newfood/index.html accessed in 26 December 2017.
- 19) 一般財団法人新潟ろうきん福祉財『団体概要』http://zaidan-hukushi.or.jp/?page_id=9#dg1 accessed in 7 December 2017.
- 20) 一般財団法人新潟ろうきん福祉財団『NPO等助成』http://zaidan-hukushi.or.jp/?page_id=69 accessed in 7 December 2017.
- 21) 公益財団法人双日交流財団『財団概要』<http://www.sojitz-zaidan.or.jp/foundation/profile/index.html> accessed in 10 December 2017.
- 22) 公益財団法人双日交流財団『助成事業について』<http://www.sojitz-zaidan.or.jp/foundation/profile/index.html> accessed in 10 December 2017.
- 23) 公益財団法人 内田エネルギー科学振興財団 <http://www.corona.co.jp/energy/> accessed in 10 December 2017.
- 24) 文部科学省『地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)』http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/ accessed in 10 December 2017.
- 25) NIIGATA COC+『NIIGATA COC+事業とは』<https://www.niigata-coc.jp/jigyogaiyo/zentaizo/> accessed in 10 December 2017.
- 26) NIIGATA COC+『国際交流WGフォーラム第1回新潟国際化デザインコンテスト開催のご報告』<https://www.niigata-coc.jp/wp-content/uploads/2017/10/bb7dcda7c518a5f5deac3e2a7e860286.pdf> accessed in 10 December 2017.